

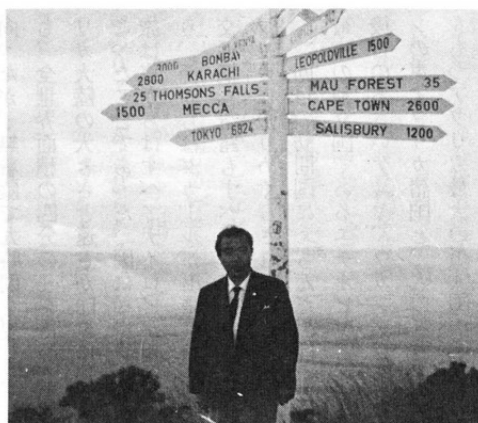
# 赤道アフリカ新興諸国への旅

— 視察・調査の覚え書きから —

石 堂 豊

## 私とアフリカのサファリー

私は米国政府の招きで、コロンビア大学へ教授・研究員交換計画で出張（一年）、南米八ヶ国の移民の教育事情の調査（二ヶ月）、英国の大学やインド大学等での滞在などを含めると、海外出張で



メネガイ・クレイン（東部アフリカの大断層にて、付近のナクル湖にはフラミンゴの大群が生息し、ナクルには日本の「中小企業訓練センター」が開設されている。東京を距ること六八二四マイルの標識が印象的だった。

は五大大陸にわたって約九十数ヶ国を訪問したことになる。南米のパラグワイの奥地では開墾地の第一線に起臥を共にして、南十字星のもと日本からの移住者と語り明かしたり、ブラジルではテコテコ（軽飛行機）で移民の現地を二千マイルにわたって訪ね日本人のたくましい生活をもみつめた。しかし、三回にわたる赤道アフリカの新興独立国への旅は強烈なまでに私の心をひくものが多く、もつとも印象的なものであったといえるだろう。

ここでは私のアフリカの旅の覚え書きからその目ぼしい印象を点描することにした。私は赤道アフリカ諸国には三度訪れたことになる。私とアフリカ諸国の第一回目（昭和三十一年）の出合いは、国連の当時のガーナー大使ケズン・サツケイ氏（後の外相で国連の総会議長）の招きでガーナ・リベリア・象牙海岸共和国を訪問したときで、ブラジルのリオ・デジャネイロから西アフリカのダカールを経てガーナの首都アククラに向う空路を選んだ西からの訪問であった。第二回

目（昭和四十一年）は、総理府の海外青年派遣第一回アフリカ団团长として、横浜港から二十三日間の航程を経て紅海のジブチに上陸した東からの赤道アフリカ訪問であった。第三回目（昭和四十六年）は、文部省学術局の派遣で国際教育会議に日本代表で西アフリカのセネガルのダカール大学に出張したときであった。

この時は羽田からモスクワを経てパリー



アベベ選手の歓迎会にて（エチオピアのアジスアベバ）

に一泊、翌日国際会議のチャーター機でパリーのオルリー空港発一路ダカールに向ったが、無着陸で九時間を要したことも、全世界面積の四分の一を占めるアフリカ大陸の大きさと遠さが印象に強くなったことであつた。因に、アフリカの旅は東からはすべてナイロビが起点であり、西からはダカールが出发点で陸上の交通網も空路もすべてここを中心に全アフリカに張りめぐらされている。

二回目の訪問国にえらんだのは、世界最古の独立国であるエチオピアと、独立後日のあさいケニヤ、ウガンダ、スーダンの東アフリカ諸国と、人口五五〇〇万をもつアフリカ最大の黒人国ナイジェリア、独立の先駆者ガーナの西アフリカ二ヶ国であつた。行程は仏領ソマリヤのジブチ（現ジブチ共和国）に上陸後各国の首都を航空機でつなぎ、国内はハイヤー、各国の政府提供の自動車をつかつて六ヶ国で空路を一万三千キロ、陸路を約八五〇〇キロ旅行したことになる。

ここで一筆アフリカ諸国の国語について

てふれておこう。アフリカの新興国の法定の国語はすべて旧宗主国の使用した言語である。すなわち英領アフリカ諸国は英語を使用し、仏領アフリカ諸国はフランス語が公用語である。例外は三千年の独立を保ってきたエチオピアがこれまた英語を国語に制定していることである。

この現状の解明はそれぞれの新興独立国が多様な部族の集合国家で、例えば、エチオピアは七十二種の部族からなり、ナイゼリアは二百五十二種の部属の連合政体であつて、どの部族も別種な土語を語っていて、どの土語をも新国家の国語には制定しがたい歴史的、政治的な根深い因由をもつことである。私は旧英領では英語で、旧仏領では仏語で語り合ったが、アフリカなまりと植民地的なくだけた慣用はあるが、文盲の住民も流暢な話しぶりで、土語と国語が器用に使い分けられていた。

## ひらけゆく大陸

アフリカといえば「暗黒大陸」のイメ

ージがわれわれの先入観を支配しがちである。最近のアフリカブームにのった多くのアフリカ旅行記やセクトーレ、エンクルマ、ケニヤッタ、ナセルなどの新興国元首の苦闘の伝記や著作など書物で読んだアフリカでは、鉄鎖を断つ苦悩の姿が大映しにされていて、傷だらけにされた未開発地帯の自然児を連想する。だが、旅でみて肌を感じたアフリカの印象はも

つとおだやかなもので、素朴な生活と大自然との調和のとれた健康な情景であつて、そこにはゆがんだ悲惨な姿は見当たらない。むしろ未開発なたくましいエネルギーのかたまりが、歴史的な目ざめの中で健康に醗酵してきた明るい生活の胎動をみ、春をえた若い生命の歌をきいたのであつた。

コンゴの内戦、スーダンのクーデター、ケニヤのマウマウ団の血の抗争、トーゴの軍事革命勃発など、近々ではナイゼリアのビアフラ（Biafra）の悲惨な内戦、エチオピア帝国の崩壊、アンゴラやザンビアの戦雲など、独立国に吹きすさんだ

嵐と陣痛の中で、さらにはカサブランカ会議、モンロビヤ会議、アフリカ五ヶ国首脳会議によるアフリカ憲章の採択や、OAVなどアフリカ統一機構への活発な政治的動向の試練にこたえて、アフリカの底力が長く閉ざされつづけた部族的習俗の殻を破つて若いいのちをふき出してきた感じである。

カーベイの全世界黒人宣言（一九二〇）にはじまり、アフリカ技術協会委員会（一九五四）AA作家会議（一九五八）、パン・アフリカ学生会議（一九五九）、パン・アフリカ婦人会議（一九六〇）、一九六三）パン・アフリカジャーナリスト会議（一九六一）などの最近の動きを眺めても、アフリカがその未開発のエネルギーを深奥からふん出させてきた若い生命のリズムが感ぜられる。私はデレック・カートンの「立ち上るアフリカ」やセクトウレの「アフリカの未来像」が為政者や目ざめた指導者との談話にだけでなく住民生活に静かな生活革命として起つていると思つた。アフリカの大地は今



ナイゼリヤのベニン王（オバ・オブ・ベニン）とアフリック二世と会見。約二五〇万を率いる大酋長。

花咲く春を迎えようとしているのだと素直に感じ、秘められた生命力が胎動を起してきて、それが住民全体にしみ渡る大きな生活革命のリズムをつくり出しているように思つた。

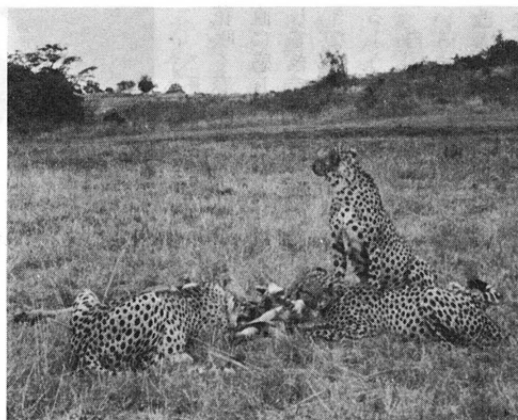
自国の独立は自分たちがかちとつたという意識が国づくりのリズムを高め生活改善のテンポを早めているのであろう。このリズムはサバンナを渡り部族の障壁

をこえて拡がりつつあるエネルギーの波紋である。私はこのたくましいリズムやエネルギーの胎動を奥地や旅行で見聞しただけでなく、数多くの青年たちや為政者との談合の中に切実に感じることが出来たのである。アフリカの各国はその潜在したエネルギーの今日的な再発見と再生産期に入ったといえる。世界が未だに知らぬ秘められた力が今や新しい表現と活動機構を求めて大きく動き出したのだとみてよい。

私はこのたくましい動きの典型をスーダンのゲジラボートの大原野計画にも、ケニア、ウガンダの青少年運動の社会開発的性格にも、ダム建設や産業技術の開発の諸計画や各国の急速な都市づくりの構想にも、大学の近代化された整備や教育行政の進展にもみたのであった。しかし、何よりも広く住民全体に高まつてきた独立の意識が伝統的な狭いトライバリズム（部族主義）をこえて拡播しつつある実態を見落せないと思う。

## ナイロビとその周辺

アフリカの旅はすべてナイロビが起点になる。高原の国ケニアは花と動物の国である。ケニア（一九六三年独立）の首府ナイロビは、人口三十五万、東アフリカの花の門である。涼しい高原のこの町でまず旅行者の目を奪うのは到るところに設けられた真赤なブーゲンビリアの花壇である。紫色の花をつけたジアカラナダ、真紅のナンディフレーム（ナンディ族の炎の花）の並木が多彩な色どりをもった洋式の近代建築とよく調和がとれていて美しい。文字通り花いっぱいこの町の秘密はナイロビの「都市委員会」が郊外にもつ大きな植物園と植物研究センターにあるようだ。ここではジャカラナダ、ブーゲンビリア、ハイビスカスなど数十種の都市美化用の熱帯植物を苗木より組織的に栽培して常時ナイロビに供給する。こうしてナイロビには一年中花を欠くことがないわけで、アラビヤ語で「



大ジカをくらうチーターの群れ（ナイロビ自然動物園）

うまい水」といわれるナイロビは同時に花いっぱいの町なのである。スイスのジュネーヴを偲ばせる美しい町なみは高い品格をもつが何よりも清潔な首府であることだ。歓楽街はなく、小さなナイトクラブが町はずれに一軒あるだけと聞いた。商店の営業も七時で打ち切られるので、昼の雑踏が消え、夜七時ともなれば、全

ナイロビのダウンタウンが色とりどりの街路灯やショウウィンドウの照明灯が輝くだけの静寂さにかえってしまふ。市民はそれぞれの家庭で家族や気のあつた友人達と団らん的な夜を楽しむ。だから青少年の非行の問題も都市特有の病理現象も殆んどないそうである。こんな美しい健康な町をつくつた英国に敬意さえが感ぜられる。

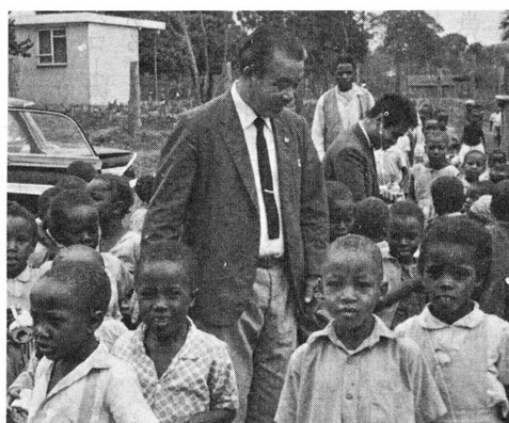
この町の郊外から有名な自然動物公園がひろがつている。見学者は凡て車を利用し、車外に出る事は禁じられている。

ライオン、ヒョウ、サイ、チーター、アフリカ象などの猛獣や火喰い鳥、キリン、シカ、シマウマなどが自然に生息し弱肉強食のままである。私たちを案内したキクユ族の運転手が面白いことをいった。

うえたライオンは恐ろしくて、シカやシマウマが近づかないが、犠牲を食べた後のライオンは友人のようで、小動物が近づいても気にもとめなくなってしまう。それに比べると人間には欲望に限界がない。自然は人類にあまりにも無制限な欲望を

与え過ぎているというのである。アフリカ人の人生観の一端かと聞いたことである。

マウマウ団の暴動も去つて、ウガンダ、タンザニアと共に東アフリカ「共同サーヴィス機構」の一員としてこの国は今ケニアタのもとに国づくりに忙しい。通用語はスワヒリ語だが公用語は英語であ



ケニヤ キクユ族の小学校にて（ナイロビ郊外二〇マイル  
コウバン区）

る。アフリカの何処の国でも同じだが、元首の写真が到る処に掲げられ住民の政治意識を高揚させている。マサイ族などに比べてナイロビ周辺のキクユ族は勤勉で明敏だといわれ、郊外のコーヒー園、トウモロコシ、野菜畑など経営の近代化が進み農地にはぶらぶらしている農民の姿はない。問題のホワイト・ハイランドも独立政府が英人より合理的に買い取りケニヤ人がとつて代つて新しい国づくりが急速に進んできている。かつての部族の酋長たちも新政府より社会開発の役割を担つて任命され建設的に活動している。酋長は独立後は住民より改めて選挙によつて選ばれ封建的な色彩はなく住民の親しい指導者の感じである。新設のケニヤ大学の外、各地に小学校や病院の増設が目立ち学校教育費、医療費が凡て無償で社会福祉にも力がいれられている。

## エリート養成所・大学

起ちあがるあたらしいアフリカを象徴

するものに大学の創設がある。各国が独立まえに赤道アフリカ諸地域からヨーロッパやアメリカ合衆国などへおくった留学生は、毎年六千人ないし八千人をかぞえた。ところが、独立後は白人支配層が本国に帰還し、新政府や諸機関は急激に白人にかわる自国民指導者を必要としたから、各国は留学方式でなく自国大学の設置によって恒常的に指導者層を育成する必要を痛感するようになった。もちろん、これは独立国のプライドでもあったといえよう。したがって、各国とも新国家建設の指導者供給源として、大学を設置しているが、量質ともこれまでの留学生の学力におとらない水準を維持するため、少数であっても、充実した大学をつくることに重点をおいているようである。

たとえば、エチオピアのハイレ・シエラツシユ大学、東アフリカ総合大学としてのケニア大学（一九六〇年の創立）ウガンダのマケレレ大学（一九四九年）タンザニア大学（一九六一年）や西アフリカのガーナ大学（一九六一年）ナイジェリ

アのイバダン大学（一九四八年）イフェエ大学（一九六一年）ラゴス大学（一九六二年）ナイジェリア大学（一九六〇年）ペロー大学（一九六二年）などがそれぞれある。

いずれの大学も歴史はあたらしいが、西欧先進国並みに設備のととのった大学である。授業料は国立であるかぎり無償であるうえに、奨学金、生活費の恩典のついたものが多い。学生寮、福祉施設、図書館も、おどろくほど早いテンポで整備されてきているのも注目している。教授は研究指導水準を低下させないために、当分の間ヨーロッパ、アメリカなどの旧大学から定期的に優秀な教授や停年教授をまねくことにしている。学生の収容能力も学部を増設がさかんで、年ごとに学生数が増加している。とりわけ大学の多くは学術研究のほかに、国土建設の指導的な役割をにない、小・中学校の教員養成機構の充実とか、文盲絶滅政策や社会開発政策とかなど、社会開発政策上の中心的機能をもっていることは見おとせない

ことであろう。

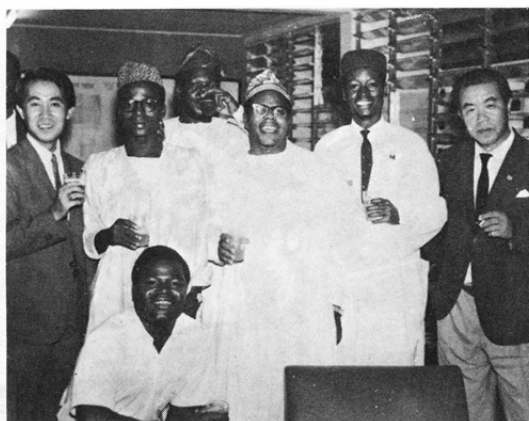
ウガンダのマケレレ大学や、ガーナ大学やナイジェリアのイバダン大学など、英米方式の「大学開放部」（Dept. staff rural Activities）には、組織的な社会教育の機能があたえられていて、国内に多くの指導センターや宿泊型学習支部を



壮大なガーナ大学と大学都市（アクラ）

ガーナが誇るアフリカ有数の大学。完全な設備を持ち、学生寮も個室でルーム・クローゼットをええ、教授の会合には自家用車が配備されている。

もち、ひろい範囲にわたって、成人教育や社会開発活動を展開している。さらに、これらの大学の多くは、ながく白人の支配下にあつて教えられなかったアフリカの諸部族の歴史や、記念すべき祖先の業績、文化遺跡、アフリカの価値体系などをもあつかう文化・社会研究所をもち、各種の文化講座を開設してきている。



ペロー大学の学生組合の幹部と教員（ナイジェリア北部州ザリヤ市）

私はこのような諸講座で、マリー王国やガーナ帝国の歴史、イフェ文化などが一般教養として教えられているのを見て、歴史教育にとりくむアフリカ大学のアクチヴな役割りを痛感したことであつた。この点でも新興アフリカの大学が、その今日のな使命の認知において種族の伝承に歴史的省察をくわえながら、ナシヨナリズムや汎アフリカニズムの課題につよくとり組んでいる点に特色があるといえよう。各国の大学で学生指導者と放談し、歓談し愉快に時をすごした。各大学とも学生組合の活動がさかんであつたが、学生たちの指導者意識の類型にも、総じて革新的だが重厚なアフリカのものをみた。ここにもアフリカ大学の課題と与望とが見出せるだろうと思う。

### 前進する義務教育の行政

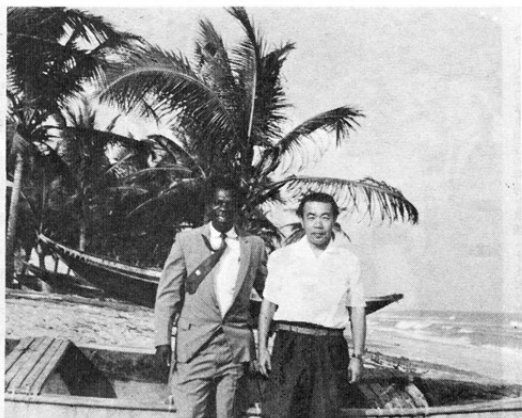
小学校は、ほとんどの国で義務教育化されているが、教育行政のすすんだガーナ、ナイジェリア、ウガンダ、ケニアな

どでも、奥地では就学率がおそまつで、エチオピアでは、いまだに義務教育は始つていなかった。どの国も年配者に文盲が多いので、文盲絶滅をふくめた学習機構や教育制度の整備が目下の重大施策になつている。各国とも教育省がその整備に力を入れ、奥地にもつぎつぎとあたらしい小学校がつくられており、新興国家の教育ムードがかなり滲透していて学歴のない年配の成人たちが夜間学校にかよう光景をみせている。しかし、今のところ、識字運動が直ちに社会での諸活動に結びつかなくて、農耕や狩猟のほかに適当な職場がみつからない実態に問題があり新産業の誘致と開拓などが、人づくりの教育行政と不可欠にむすびついた新政府の労働行政や社会開発行政の喫緊の課題になつている。

西アフリカのガーナは、訪問国のなかで、もつとも教育の普及したところである。文盲も四〇％以下、農村の各地にも、小規模ながら、多くの「地区技工学校」「女子職業学校」がつくられ国土建設に



ガーナ大学教育学部長のアーク博士と共に  
「ゲナ」首府アクラの海岸にて



情熱的であつた。これは教育制度のおくれた東アフリカのエチオピアの農村風景とまったく対照的だった。

教師の問題については、ナイジェリアなど旧型の地方師範学校や教員養成所が新設の大学によってコントロールされ水準の向上をはかっているが、急速に増設されつつある小学校で教師の絶対数が不

足している現状である。また、大学の設置と義務教育機関の増設の必要から、中等教育にまでは手がおよばず、その振興はこんごの問題としてのこされている。

したがって中等教育は私学にまかせられているところが多く、教師も不足しているのも、アメリカの平和部隊（ピース・コア）の援助にたよっているようだ。東アフリカ諸国でも、ピース・コアの活動は大きい、ナイジェリアなど、四〇〇名ものピース・コアがひろい領域で活躍していた。

### スーダンのゲジラボード

スーダンのゲジラボード(Geiza Board)は新しいアフリカの国土計画の成功した典型である。スーダンの青ナイル県の一部のカルツームの郊外から南方セナールにいたる約五百万エイカーの不毛だった砂漠の沃土計画だ。ゲジラとは「水島」の意味で青ナイルと白ナイルの合流点に建設され、セナール地区に青ナイルの大

ダムをつくり、整然ととり入れられた無数の運河によって、砂漠を肥沃な綿花地帯と牧畜農場に改造したものである。現在では第二次計画のマナジル地区八十万エイカーを加え、入植人口七十五万、新しい学校の設置、病院、福祉施設、社会教育の諸計画など、ゲジラが世界的に誇る社会開発計画が着実に進み、スーダンをささえる経済的バックボーンにまで発展している。一九一一年タイバー地区での綿花の実験栽培に始まり、以後英国政府よりの借款で大ダムや運河を開設し、第一次大戦で中断したが一九二五年に第一次ゲジラ計画が完成、第二次大戦後の一九五六年には第二次計画のマナジル計画が進み、同時に独立後は特別行政区「ゲジラボード」として国有化されたものである。

ゲジラボードは政府のコントロール、私企業の自由、協力作業の三原則よりなる独特な結合機構で、(1)政府(2)耕作農民(3)英国利権会社の三者協同経営として三者の役割と分担と利益配分の構想として



出発した。政府はセナールダムの建設、運河の開設と維持、土地国有化の推進をうけもち、英国利権会社は経営資金の貸しつけ、輸送業務、綿くり工程の整備、販売に責任をもち、耕作農民は一定基準の生産責任を分担する。こうして利益金の配分は政府四〇％農民四〇％会社二〇％であったが、大成功をおさめた。



スーダンのゲジラボードのマナシル市長と。

スーダンの独立後は英国系利権会社に「ゲジラボード」(ゲジラ特別庁)がとって代り、ゲジラ法のもとに順調に運営され輝かしい生産をあげていて、自由経済を基調としながら経営協同化された「社会的・経済実験」として世界の注目をあびつつある施設である。

私達は首都カルツームから空路でゲジラボードのワド・メダニ空港を訪れたが、上空よりみれば約一時間にわたり眼下に整然と耕作されているゲジラがその豊沃な姿を砂漠の真中に展開するのは壮観であった。今日ではゲジラの百八十万エーカーが最良質の綿花栽培を主産業に、常食のこうりゃんや野菜、牧畜用のまぐさを大量に生産している。

ゲジラボードは二種の「運営委員会」と「ゲジラ庁社会開発局」によって運営されているが、第一に関心を引くのはその斬新な社会開発事業で、アフリカ諸国の中でも最もすんだ住民福祉政策が実施されている事である。例えば住民の保健計画では、全地区に数百の深い井戸を



スーダンのゲジラ・ボードの公立幼稚園。教育費は一切無償化され、近代的な設備のもの。

掘り、ディーゼルや風車による動力給水を行ない、多くの病院をつくり、マラリア・結核・住血吸虫の駆除対策など環境福祉に力点がおかれ、大規模な農事試験所、農民組合による憩いの家の建設、スポーツ・クラブの増設や野外劇場、実験農場や農民訓練所、幼稚園、新しい施設の小中等学校の増設、生活改善運動や日々の「村落談

話会」(各部落毎に毎夕会合)など、数多くの新しいプロジェクトが前向きの姿勢で次々に実施されていることである。とりわけ、ゲジラの社会教育は住民の公民的教養と生活改善や殖産技術の向上を目ざして、極めて組織的であつて注目すべきものがある。全ゲジラ地区を六地区に分け、更に四十六のブロック(分區)に分ち、一ブロックに十乃至十五の村落セクトを含めて、地区毎に社会教育官と婦人の生活指導官が常住し、村落には一定の訓練をうけた篤志の社会教育助言者が任命され、多彩な社会教育関係学級、成人講座が開設され多くの学習参加者を得ている事であつた。このゲジラの計画は今後も周辺に向つて発展させる方針で、国立の「調査研究所」が砂漠の土壤分析や遊牧民の生活や土着民の民俗關係について科学的な調査をすすめている。

## 民俗さまざま

どの国も、下町の市場は大にぎわいで

雑踏をきわめる。青空市場からスーパーマーケット型まで、様式もとりどりで、食料、世界各国の雑貨から、燃料用になまなましい馬フンまで売つていた。魔法の医者ジュジュの店には、怪奇な品々がならび、ふるいアフリカのままだつた。

ガーナのアクラやナイジェリアのラゴスの市場では、タカの一群が屋根にならんで獲物をうかがい、時には、人ごみにまじつて共存している奇異な風景さえあつた。すごい熱気のなかに、アフリカ名物のマーケット・マミーのエネルギーユな声が印象的だつた。

住民の伝統的な食物にカツサバ(ヤマイモの一種)がある。マニラ麻のような灌木の根で、大型の甘薯に似ている。食べかたも、地域により種族によつて様ではないが、粉にして、ヤギの肉やカバの肉をいれてスイトン汁にしたり、あるいはモチのようについて、ヤシの葉でつんで石焼きにしたりして食べる。ひろく栽培され、山野にも自生するので、食生活にはあまり苦労はしていない。住民

に貯蓄心がなく、民族資本のよわさが新興国に共通するなやみで、これは因襲的な衣食住の安易さからきているのかもしれない。独立後はどの国も、アンチ・ヌーティスト運動が滲透し、はだかの人たちはめつたに見られなくなつた。とりわけ、婦人たちはおしやれで、原色のうつくしい衣服が印象的だつた。衣服を買う費用をやりくりするおかげで流通経済が動きだした感があるほどで、男にくらべて、婦人たちはよくはたらく。頭上におもい荷物をはこぶのは婦人や子どもたちである。

男子に定職がすくなく、はたらく意欲はめざめてきてはいるが、ながらく支配した植民地政策のためか、生涯つづく職業技術の習慣がない。ここに、独立後、新興諸国がきそつて、文盲絶滅運動とあわせて職業技術教育を重点施策にしている理由がある。各国は教育者や労働省、社会開発省をとおして、あたらしい青年教育を重視し、学校教育、社会教育ともに、めざめたリーダーの養成にちからを

そそいでいる。

どこでもとれて、安あがりの酒はオズである。ヤシのようなバーム・ツリーからとれる地酒で、樹液をかもしたものだ



アチヨリ族の歓迎舞踊（ガンダのグルー）

がアルコール分は意外に多い。オズをくみかわして踊るアフリカの夜や祭りの風景は、もつともアフリカのなものの象徴であろう。

ウガンダの奥地グルー地区ボビにアチヨリ族の大酋長を尋ねたときなど、数千の踊りの衆が酋長傘下の各集落から参集し、歓迎の踊りのうずは、サバンナをうしおのごとく去来して数時間におよんだ。アフリカ三万キロの旅で、さまざまな民俗舞踊をみた。ちから強く、健康な美の躍動だった。民俗の歴史もたたかいの意気も恋のなやみも、すべて歌とおどりに託される。タムタムの音律とリズムミカルな民俗舞踊は、アフリカの地に生えたそぼくな叙事詩であり、燃えさかる雄渾なエネルギーの放出といえようか。

### アフリカのこころ

アフリカの旅で、わたしは、近代化する都市や新設の大学に、あるいは独立を謳歌する指導者の感慨と抱負に、躍進す

るあたらしいアフリカのすがたをみた。同時に、集落や土民の生活に、西欧化にとまどう部族の心情に、因習のこびりついた古いアフリカをみた。

砂漠にえがかれる風紋のように、独立のよろこびと新興国民の自覚は、サバンナをわたり、部族の障壁をこえてひろがっているが、しかし、依然として、二つのアフリカが感ぜられたのであった。

その古いアフリカは、文盲のせいであろうか、あるいは大自然にそだったアフリカ人の心がそうさせたのであろうか。

旅でみた私の印象は、アフリカの広大な未開拓の大地とうごきだした人口資源であり、信頼できる誠実な人間性であった。大自然の中の素朴だが「健康な生命感情」を、不用意にも「おくれたもの」として、ありきたりのカテゴリーから批判することは、つつしむべきではないだろうか。若いアフリカが、二〇世紀の人類に知恵を提供するしごとは、これから始まるのかも知れないから。